

江戸の風呂

今野信雄



新潮選書

マンションと、会社と、ラッシュの電車。

現代の生活はまさしくマッチ箱のなかのうごめきだ。されば個性をどこかにないか…

あった、あった
地ここにきわまる
したのは露天風呂
身も心も裸で語

江戸時代の風俗からのぞいてみたのがこの書である。

著者

えど　　ふうろ
江戸の風呂

〈新潮選書〉



© Nobuo Konno 1989, Printed in Japan

一九八九年二月一〇日 印刷
一九八九年二月一五日 発行

定価 八五〇円

著　　者　　今　　野　の　　信　　雄
発　　行　　者　　佐　　藤　　亮　　一

東　　京　　都　　新　　宿　　区　　矢　　来　　町　　七　　一
發　　行　　所　　株　　式　　會　　社　　新　　潮　　社

郵　　便　　番　　号　　一　　六　　二
電　　話　　業　　務　　部　　(03)二六六―五一一
編　　集　　部　　(03)二六六―五四一一
振　　替　　東　　京　　四　　一　　八　　〇　　八　　番

製　　印
本　　刷　　錦　　明　　印　　刷　　株　　式　　會　　社
株　　式　　會　　社　　大　　進　　堂

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-600355-4 C0339

今野信雄

新潮選書



はじめに

私は仕事の都合でしばしば旅をする。もちろん旅の疲れをいやすのは、風呂が一番、酒が二番だ。そして民宿や国民宿舎でないかぎり、たいていは部屋に小さな風呂がついている。しかしこのルーム・バスにつかる人はほとんどいない。旅館の手拭いをもって、わざわざ大風呂を探してまわるのだ。そこには減多にお目にかかれないうる天国がある。そして分譲住宅やマンションの、手足がつかえるポリ風呂の欲求不満を、そこで一気に解決するのだ。さらに最近の人気の的は露天風呂で、観光地の旅館はどこも穴掘りに忙しい。

考えてみれば都会の生活は、すべて四角い箱の中に押しこめられた毎日である。オフィスにしても、住居にしても……。しかも仕事ですら機械が解決し、人間が人間らしく生きるスペースは、もはや極端にせばめられている。そんなとき、温泉の大風呂こそが、日頃のしがらみを全部捨てきって、思う存分手足がのびせる所なのだ。今日の旅行ブームの原因の一つは、意外にそうした面にもあるのではないか。

しかるに都会の銭湯は、いままさしく崩壊しつつある。浴客の減少で、年々経営状態が悪化し、やむなく閉鎖にいたる銭湯が多いという。そしてまた一方、減少する客足を留めるため、各銭湯

とも人手をコンピュータにかえて経営を合理化し、電気風呂やら超音波マッサージ、サウナ風呂まで用意して、多様化する客の要求に応えようとする。なかにはスナックを設け、カラオケの用意までして、サービス万全の心構えを見せる店もある。中京地区では、二食つき、宿泊自由で、一ヶ月七万円余の大浴場が軒並みにあるという。さすがに高齢者が多いようだが、これも風呂天国の一つ、結構なことではないか。

銭湯は本来「裸」だからいいのだ。ここでは親子の対話もはずみ、高齢者は青年の会話から現代を知り、青年は高齢者の話を聞いて社会のしくみを知る。いわば銭湯は、日本独特の文化の母胎であるともいえるだろう。これが往年の隆盛をとり返すことは不可能である。なぜならば住生活の基本が変わってしまったからだ。しかし別の形で庶民の憩の場になることは可能のはずである。今や大企業ですら、一業種をまもって繁栄することは難しい。さまざまな業種に着手して複合企業になりつつある現代だ。銭湯もまたサービス業という幅の広い分野で、より楽しく心を解放する工夫ができないものだろうか。

私流に少々都合のいい解釈をするならば、週休二日制は、やがて間もなく週休三日制になることは確実だ。しかも労働時間は大幅に短縮される。その場合、サラリーマンはありあまる時間をどうするか。そうした彼らの目を、再び銭湯に向けることは不可能ではない。ただしそのためには、若者のコミュニティが誕生するような現代性が欲しいのである。資金の問題もあるだろう。敷地の問題もあるだろう。しかし全国のお風呂屋さん、「どうかアイデアをしばって、もう一ふんばり頑張つて下さい」

今回この書の刊行に際し、参考文献の著者、編者に対し、あらかじめご挨拶申し上げるべきところ、病後のことでもあり、身勝手に横着させていただいたことを深くお詫びするとともに、全国公衆浴場業環境衛生同業組合連合会の石川保常務理事をはじめ、数々のご意見を頂戴した諸先輩、史遊会の面々にはこの場をかりて厚くお礼を申し上げます。

また新潮社業務部の八木研次郎部長、出版部の南政範次長とは、三年前にある企画を約束したのだが、それも果たせぬうちに自分勝手にこの原稿を先行させてしまった。しかるに両氏から一言のお叱りもなく、発刊を快諾していただいたことはまことに感謝の至りである。

いつもながらのことだが、この書はけっして学術書ではない。風呂風俗を通じて、当時の世相をとともに楽しんでいただけでは幸甚なのである。そのためには難解な原文には私流の解釈を加え、また旧仮名づかい、旧漢字もおおかた現代流にしたことは、あらかじめご諒承願いたい。駅や喫茶店での待ちあわせの際に、あるいは就寝前のベッドで気軽に読んでいただきたいものと思っている。

一九八八年十二月

今野 信雄

江戸の風呂・目次

はじめに 3

一 江戸の湯屋……………15

銭瓶橋の蒸風呂 15

湯屋の構造 19

戸棚風呂と柘榴口 22

男湯と女湯 26

入込湯 31

薬湯と再生風呂 36

二 湯屋風景……………40

江戸ッ子のあつ湯好き 40

自分勝手なのだ自慢 45

はだかの喧嘩 50

のぞきと板の間稼ぎ 55

四季のいろどり 59

三 湯道具さまざま……………64

入浴七ツ道具 64

風呂ふどしと湯文字 65

手拭い・垢すり・毛切り石 69

糠袋と中身 72

石鹼としゃぼん 76

楊枝と歯みがき 81

小桶と留桶 84

四 湯屋の仕事……………86

番 台 86

木 拾 い 90

三 助 92

湯 女 97

吉原送り 102

五

経営と入浴の教訓書……………111

湯語教……………111

安かった湯銭……………118

養生訓……………120

六

風呂の種類……………123

据風呂……………123

石風呂……………127

釜風呂……………130

行水……………132

行水舟（湯舟）……………134

二階風呂……………135

雁風呂……………136

勝山……………105

本日休業……………108

七

信仰と伝説

.....143

御湯殿上日記

138

宮中のうぶ湯

141

光明皇后の施浴

143

鎌倉時代の施浴

146

重源の石風呂

148

盟神探湯

151

湯立神事

154

伝説の出湯

158

八

温泉繁盛

.....163

のどかな箱根七湯

163

熱海の大湯は落雷の響き

168

東の大関草津の湯

172

草津千軒江戸構え

177

九

近世の風呂

.....185

外国人が見た銭湯

185

改良風呂

189

されど二階は二階

191

適温のすすめ

194

奥座敷の風呂

196

十

浴場異聞

.....199

せめて木太刀を——源義朝

199

修禪寺の悲劇——源頼家

203

当方滅亡——太田道灌

206

八千石を追づれに——幡随院長兵衛

210

裸で撃退——抽斎の妻

213

参考文献

215

江戸の風呂

一 江戸の湯屋

銭瓶橋ぜにかめばしの蒸風呂

江戸ッ子と銭湯とは切っても切りはなせない。それも道理、東照大権現さま（家康）が江戸入りした翌年、天正十九年（一五九二）に、はやくも湯屋ゆやが開業したからだ。

場所は今の常盤橋とぎわはしと呉服橋の中間にあつた銭瓶橋ぜにかめばしのたもと。創業者は伊勢からひとかせぎをもくろんで出てきた与一という男だった。銭瓶橋の名の由来は、橋を架ける工事中に、土の中から永楽銭を埋めた瓶が発掘されたところからつけたのだが、さすがは伊勢商人の血をひく与一だ。「縁起上々」とばかりこの地を選んで創業したのである。

三浦浄心の『慶長見聞集』けいちょうけんもんしゅうによれば、

「（この風呂の）風呂銭は永楽一銭（永楽通宝一枚）なり。みな人めずらしきものかなとて入りたまひぬ。されどもその頃は風呂ふたんれん（なれない）の人あまたありて、あらあつ（熱）の湯の雫や、息がつまりて物もいわれず、煙にて目もあかれぬなどと云て、小風呂（むし風呂）につきものの